

# 「神的な闇」と人間

——偽ディオニシウス・アレオパギタ『神秘神学』の  
ピコ・デッラ・ミランドラにおける受容について——

伊藤 博明

15世紀のフィレンツェ・プラトン主義者の一人であるジョヴァンニ・ピコ・デッラ・ミランドラ (Giovanni Pico della Mirandola, 1463-1494) に関する近年の研究において顕著なことは、中世哲学との影響関係を問題とするものが多いことである<sup>1)</sup>。これには、中世哲学とルネサンス思想の断絶を強調し、後者の「近代性」を称揚する従来のルネサンス観、そして、ピコをこうしたルネサンスの代表的思想家とする見方に対する反省という背景があるのであるが、精密なテキスト読解を踏まえた上での比較検討は、ピコ思想のより深い理解にとって必須であるばかりか、新たな解釈を導出する可能性を含んだ作業であると考えられる。本稿で取り上げる偽ディオニシウス・アレオパギタ (Ps.-Dionysius Areopagita) は、パウロの説教によって改心した者という「古代性」ゆえに、また、その教説の新プラトンの傾向のゆえに、ピコによってとりわけ重視された思想家であった。以下、特に神と人間の問題を巡って、偽ディオニシウスの『神秘神学』 *De mystica theologia* がピコに与えた影響を論じることにした。

## I

われわれはまず、『存在者と一者について』 *De ente et uno* という小論考を手がかりに、ピコにおける神の把握から考察することにする<sup>2)</sup>。この著作は「一者」と「存在者」に関してプラトンとアリストテレスの見解が一致していることを論証することを目的としているが、そこでは、一者と存在者がしばしば「神の名」として言及されている。その第三章は、「存在者と一者が等しいかどうか議論されるときに使われる存在者という言葉は二様の仕方では受け取られる」 (p. 396) という記述から始まる。その第一の仕方

は、ピコによれば、われわれが「無以外のものすべて」を理解する場合であり、アリストテレスが存在者と一者は等しいと述べた時には、その意味で受け取られなければならない。パルメニデスが一者は「存在するところのもの」*id quod est* と等しいと述べているとき、彼は、神のことを理解していたのである。つまり、彼は「存在するところのもの」が真に適合し、真に在るものは、ただ一者なるもの、すなわち、神であることを示したのである。そしてピコは、「一者が存在者に優越していると主張するプラトン主義者が依りどころにしている」ディオニシウスの言葉を引用して、次のように述べている。「しかし、われわれに反対して議論している人々が自分たちの見解の保護者として、ディオニシウス・アレオパギタもまた、神からモーセに、《私はあるところのものである》*Ego sum qui sum (...)* と真に言われていることは否定しないであろう」(p. 398)<sup>3)</sup>。ピコはここで、いわば「卓越の道」*via eminentiae* によって神を存在者として捉えていると考えることができるだろう。すなわち、存在者という名が真に適合し、真に在るのは、ただ神だけであるという意味で、神に存在者という名を帰しているのである。

ピコは続く第四章で存在者の第二の受け取り方について説明している。その仕方に従えば、存在者の上に置かれるものがあり、それが一者と呼ばれるものなのである。この論証の要となるのは「分有」の概念である。光るものは光によって光り、また、白いものは白さによって白くなるのであるが、しかし、抽象的と言われるものは、具象的なものによっては適切には名指されえない。ピコは、この「分有」という概念を存在者にも適用して、光を分有しているものが光るものと言われるように、また、見ること自体を内在させているものが見るものと言われるように、存在自体を分有しているものが存在者と呼ばれると述べる。ところで神は、自らによって自己自身から存在する「存在自体」*ipsum esse* であって、万物はそれを分有することによって初めて存在する。「なぜなら、神は全存在の充満であり、彼だけが自らによって存在し、彼だけから、介在するいかなる中間物もなしに、万物が進みでるからである」(p.402)。こうした記述の中に、ピコの神に対する第二の規定が表されている。その規定とは、簡潔にまとめると、神は存在者ではなく、存在者の上にあり、その分有によって万物が存在するところの「存在自体」である、となるであろう。そして、ピコは、ここでは、いわば「原因性の道」*via causalitatis* によって神に接近しようとしている、と理解することができる<sup>4)</sup>。

ピコは続いて、神は一者と呼ばれているのであるから、その限りで、一者は存在者の上位にあることになろうと述べている。この見解は、ピコが新プラトンの理解に戻った印象をわれわれに与えるが、次の言葉はそれを明確に否定している。「さて、ここでわれわれは、神を一者と呼ぶのであるが、われわれは神が〈何であるか〉 *quid sit* を述べているわけではなく、むしろ、万物である神が〈いかなる仕方〉 *quomodo* 万物であるか、また、〈いかなる仕方〉 神自身から他のものどもが存在するかを述べているのである」(p. 402)。この一節は注意深く読む必要がある。神が一者と呼ばれるとき、それは、神の〈*quid sit*〉、すなわち、〈*quidditas*〉ないしは〈*essentia*〉が表されているのではなく、むしろ、神と万物との関係の〈*modus*〉が問題とされているのである。デ・ナポリは、この個所に注釈をつけて「*esse* という名は、神の絶対的な〈*quid sit*〉を表し、他方〈*unum*〉は神と諸存在者の関係の〈*modus*〉を表す」と述べている<sup>5)</sup>。しかし、このトマスの解釈は可能であろうか、むしろわれわれは、ピコは、存在者の上に存在がありそれが一者と呼ばれる、と明確に述べているのであるから、存在それ自体も神の〈*quidditas*〉ではなく〈*modus*〉であると理解すべきではないだろうか。そして、その疑問は、続く『存在者と一者について』第五章の議論から解かれるように思われる。

## II

第五章におけるピコの神認識の方法は、一般に「否定の道」*via negationis* ないしは「除去の道」*via remotionis* と呼ばれているものである。ピコによれば、生は或る存在者であり、同様に、知恵も正義も或る存在者である。そして、もし個別性と限定の条件を取り去るならば、「あれやこれやの存在者」ではなく、「存在者自体」*ipsum ens* にして「端的に存在するもの」*simpliciter ens* が残るであろう。同様な作業を他のもの、すなわち善なるものや一者に加えるならば、「すべての事物からその類の下にある不完全性とその類の個別性を排除したときに残るものは神であり、それゆえ、神は存在者自体、一者自体、善なるもの自体、真なるもの自体と呼ばれる」(p. 412)。こうして、神の名として、四つのいわゆる「超越論的観念」*transcendentia*、ピコの言葉では、万物を包含する「普遍的な諸名称」*universalia nomina* が数え上げられることになる。そして、この段階の神の把握は、先にみた第三章における、「卓越の道」によってえられた存在者としての神認識に対応していると考えられる。続いてピコは、さ

らに「否定の道」を進むべく、次のように述べている。「すでにわれわれは、二つの段階を進んで、神の諸名称から、表示される諸事物の不完全性に由来するすべての汚れを清めつつ神が住む闇 *caligo* へと昇った。いまなお二つの段階が残されており、その一方は、諸名称の欠陥を論証するものであり、他方は、われわれの知性の弱さを告発するものである」(p. 412)。

そしてピコは、先に第四章における「原因性の道」による神認識の際に用いた「分有」の概念を再び導入して議論を進める。すなわち、存在者、一者、善なるもの、真なるものという名称は「具象的なもの」*concreta* を語っているのであるとして、神を、存在者、一者、善なるもの、真なるものを越えたもの、すなわち、存在自体、一性自体、真理自体、善性自体と名付けることになる。先の議論との関係で言えば、「存在自体」は、他の超越論的観念と同じ身分として捉えられており、この限りでは、ディ・ナポリのように、それが神の *quidditas* を表しているとは理解することはできない。それでは、神の *quidditas* とは何なのであろうか。そして、われわれはそれを認識できるのであろうか。ピコは次の様に述べている。「しかしわれわれは、今なお光の中にいる。他方、神は、彼の隠れ場を暗闇の中においている」(p. 412)。

このピコの言葉が示しているのは、神について語り理解する限りでわれわれはまだ光の中にいるのであり、神はわれわれの知性の能力をはるかに越えたところに存在するのであって、実は、われわれは神についてほんのわずかなことしか話したり感じたりしていないという事態である。ゆえにピコはこう続ける。「それゆえ、われわれは第四の段階へと上り、無知の光の中に入ろう。そして、われわれは、神的輝きの闇によって盲目にされて預言者と共に《主よ、あなたの住まいの中で無力なものになりました》と叫ぼう」(p. 414)。

こうしてわれわれは、偽ディオニシウス・アレオパギタ『神秘神学』のモチーフがきわめて明瞭にピコにおいて語られていることを見い出す。ディオニシウスがティモテウスに示したのは、感覚と知性的な働きを、一切の感覚されうるものと知解されるものを、一切の存在しないものと存在するものを捨て去って上昇し、一切のものからの束縛を解き放される純粋な離脱によって神的な闇という超実体的な光箭へと、一切のものを除去しつつ一切のものから解き放されて引き上げられる可能性であった<sup>9)</sup>。ディオニシウスによれば、否定・除去の道を最後まで進んだ者は、見ることと認識することを越えたも

のを、いわば盲目と不知とによって見かつ認識できるのである<sup>7)</sup>。ディオニシウスが言うように、神は、われわれが形成しうるあらゆる名称、われわれによって語られるあらゆる概念を越えているのであるから、それは「何々の上に」としか表現されえないのである。偽ディオニシウスの「否定神学」は、「肯定神学」の到達した最終的なものを出発点として、逆に最初のものに至るまで、「肯定神学」が措定し肯定したすべてのものを除去し否定するものであった。ピコも同様に、神の名として「卓越の道」によってえられた「存在者」を否定し、次に「原因性の道」によってえられた「存在自体」を否定した。神は、われわれによって積極的な名で呼ばれえないものであり、つまり、神の〈quidditas〉は、積極的に語られるものではない。ただわれわれは神を「考え出されうるあらゆるものよりも無限に大きなもの」と言うだけである。ピコは、第五章の議論を「あたかもすでに闇の中におり、神について可能な限り最も聖なる仕方語っているディオニシウス」(p. 414) の『神秘神学』最終章からの長い引用で締めくくっている。

### III

次に、ピコのこうした神理解と『神秘神学』の受容を、彼の思索の中で重要な位置を占めていた人間の問題との連関の中で考察することにしたい。ピコの人間観が表明されている『人間の尊厳についての演説』*Oratio de hominis dignitate* の記述によれば、神は、人間に定まった席も固有な相貌も特有な贈物も与えなかったが、それは、人間が、自分の望み通り、自分の考えにしたがってどんな席でもどんな相貌でもどんな贈物でも手にいれ所有できるようにするためであった。予めその本性が決定されている他の被造物とは異なって、人間は自己の自由意志に基づいて自己の本性を選択し決定する存在とされる。父なる神は、人間の中に、あらゆる種類の種子と生命の芽を挿入したのであり、人間は、自分が育む種子と芽に応じて自分の果実を産み出す。すなわち、それが植物的なものならば植物を、感覚的なものならば獣を、理性的なものならば天界の生きものを産み出す。そしてそれが知性的なものならば天使、ないしは神の子となり、「さらに、もし彼がもろもろの被造物のいかなる身分にも満足せずに自らの一性の中心へと退きこもるならば、その霊は神と一つになり、万物を越えたところにおられる父の〈孤独の闇〉におかれて、万物の上に立つものとなるでしょう」(p. 106; 邦訳18頁)と言われている。

このピコの人間本性の理解には、二つの要素が混在していると考えられる。一つは、人間を「マクロコスモス」として捉える伝統的な本性観であり、もう一つは、それを越えて、人間本性を「不定なるもの」と考える見方である<sup>8)</sup>。前者に関しては、とくに『ヘプタプルス』*Heptaplus* と題された作品中の、「神の似姿と類似」としての人間の解釈において示されている。ピコは、人間に固有な尊厳と他のいかなる被造物とも共通でない神の実体の似姿が認められる人間の中の「或る特有なもの」を問うて、次のように答えている。「それは、人間の実体が、(或るギリシア人の解釈者が示唆しているように) 自己の内にすべての本性の実体と全宇宙の充満を、現実包含していること以外の何かであろうか」(p. 302)。ピコによれば、天使も、すべての事物の形相と概念で満たされて万物を認識するときには、或る仕方では自己の内に万物を包含しているが、それは「現実に」というわけではない。人間は、神と異なる仕方であるが神と同様に、万物を認識するだけでなく、自己の実体の完全性の中で全世界のすべての本性を所有し、結合しているとされるのである。つまり、「神は万物をその根源として自己の内に含んでいるが、人間は万物をその中心として自己の内に含んでいる」(p. 302) ののである。この議論において理解されている神は、先に論じた「原因性の道」を介して捉えられた「存在自体」に対応している。それでは、「否定の道」を介して指示された「存在自体」を越える存在としての神に対応する、人間の中の似姿とはいかなるものなのであろうか。それは、ピコの人間の本性に関する理解のもう一方、すなわち、『人間の尊厳について』の冒頭の個所に端的に示されているような、人間の「不定なる本性」であると考えられる。確かにピコのテキストにおいて、この対比が明確に示されている個所は存在しない。しかし、ピコがディオニシウスを引きつつ、いかなる名称も概念も属さず、また、いかなる措定も除去も属さないとした神の〈quidditas〉に、いかなる「固有のもの」*peculiar*e も持たない人間本性が対応しているように思われるのである。

最後に、人間本性の不定性をもつ別の側面に触れて、神と人間の問題を考えておきたい。ピコは、こうした予め定まった本性を持たずに、それを自己の自由意志によって造る人間の存在を、確かに「父なる神のこのうえない寛大さよ、人間の最高にして驚嘆すべき幸福よ」(p. 106; 邦訳17頁) と述べて賞讃している。しかし、人間本性の不定性は、見方を変えるならば、その不安定さをも表していると理解できる。人間は、天使と肩を並べることもできる一方で駄獣に墮しえる存在である。そして、その決定は、人間

の自由意志にだけかかっているのである。しかし、この人間の自由意志ほど不確かなものはないのであり、われわれは、知らず知らずのうちに感覚に身を委ねていることもあるし、また、善を欲しながら悪をなすこともある。ゆえに、ピコは、「父のこの上もなく慈悲深い寛大さを、すなわち、父が与えた〈自由な選択〉を誤用して、救いをもたらすものから罪をわれわれ自身につくりださないように」(p. 110; 邦訳21頁)と、注意を喚起するのである。そして、ピコは、凡庸なものに満足せず、至高なものを熱心に求めて、到達すべきものへと全力を尽くして突き進もうとわれわれを鼓舞する。この激しい神への希求は、ピコに特徴的なものであって、彼の諸著作から明瞭に読み取ることができるものである<sup>9)</sup>。ピコにとって神は、まず第一にわれわれが全力を尽くして到達されるべき目的として捉えられていた。他方、この神を求める人間は、その与えられた自由意志の使用によっては獣同然の存在にも墮する不安定な存在である。人間の本性は不定であり、いわば「何ものでもない」のに対して、神は万物であり、それをも越えた存在である。この神と人間の隔絶感を抱きながら、しかし熱心に神を希求するとき、人間にとって神は「神的な闇」として現れるとピコは理解したのではないであろうか。『人間の尊厳について』においてすでに見える「万物を超えたところにおられる父の孤独の闇」という表現は、そのことを証しているのではないであろうか。

こうして、ピコの人間本性に関する教説は、一方では、人間の神との類似を媒介として神の超越性と対応する人間本性の卓越性を表し、他方では、神と人間との絶対的な隔たりに起因する人間本性の不安定性を示している。ただし、言うまでもなくこの二面性は、ピコの人間把握において矛盾的なもの、あるいは、相補的なものとして共存しているのではなく、ピコの独自の人間本性観が結果として要請するものなのである。そして、こうした要請の背後には、ピコの絶対的な超越者としての神理解があり、そして、偽ディオニシウス・アレオパギタ『神秘神学』のピコにおける受容があったと考えられるのである。

## 註

- 1) e. g. G. di Napoli, *Giovanni Pico della Mirandola e la problematica dottorinale del suo tempo*, Roma, 1965. H. de Lubac, *Pic de la Mirandole: Études et discussion*, Paris, 1974. I. Colosio, "Pico della Mirandola e la scolastica", in *Studi pichiani*, Modena, 1965, pp. 41-57.

- 2) ピコのテキストはガレン版著作集 (G. Pico della Mirandola, *De hominis dignitate, Heptaplus, De ente et uno e scritti vari*, a cura di Eugenio Garin, Firenze, 1942) により, 引用はこの著作集の頁をもって示す. なお、『人間の尊厳について』については, 邦訳 (大出哲・阿部包・伊藤博明訳, 国文社) の頁を付記する.
- 3) cf. Ps.-Dionysius Areopagita, *De divinis nominibus*, I, 6, PG 3, col. 596A-B.
- 4) こうしたピコの神の把握は『存在者と一者について』以前に執筆された著作の中でも述べられている. cf. *Commento sopra canzona de amore composta da Girolamo Benivieni*, I, 1, pp. 461-462; *Heptaplus*, III, 1, p. 248.
- 5) G. di Napoli, “L’essere e l’uno in Pico della Mirandola”, *Rivista di filosofia neoscolastica*, XLVI (1954), p.376. cf. *idem*, “G. Pico della Mirandola e la teoresi tomistica dell’ *ipsum esse*”, in *San Tommaso: Fonti e riflessi del suo pensiero*, Roma, s. d., pp. 249-281. E. Garin, *Pico della Mirandola: Vita e dottrina*, Firenze, 1937, pp. 119-136.
- 6) cf. Ps.-Dionysius Areopagita, *De mystica theologia*, 1, PG 3, coll. 997B-999 A. (大出哲訳, 『カトリック神学』, 第7号, 1965年6月, 185-6頁).
- 7) cf. *ibid.*, 2, col. 1025 A. (同上訳, 188頁).
- 8) 詳しくは, 拙稿「ピコ・デッラ・ミランドラにおける「人間の本性」の問題」(『倫理学年報』第36集, 1987年, 19-35頁) を参照.
- 9) cf. *De ente et uno*, cap. 10, p. 438. *Heptaplus*, Exp. primae dictionis, p. 382.